2024年3月10日(日) 山陽新聞 [エリア広域]

認知症の人とともに

岡山県内5大学生連携「オレンジパートナー」1年

福祉や看護を学ぶ岡山県内5大学の有志が連携し、認知症の正しい理解へ啓発などを行う団体「オレンジパートナー」を結成して1年が経過した。シンポジウムの企画・開催などを通じて、当事者や家族の声を聞き、学びを地域に還元して誰もが暮らしやすい社会づくりに結びつけようと取り組んでいる。合言葉は「認知症の人とともに」だ。(斎藤章一朗)

シンポ開催 当事者の声、学びを地域へ

シンポジウムで、認知症に対して自分ができることを書いた紙を掲げる参加者。学生の工夫が随所に見られた＝6日、川崎医療福祉大

「一方的な支援はいらない。『助けて』と言える関係をつくってほしい」。39歳で認知症と診断され、仙台市で働きながら、講演で全国を巡る丹野智文さん(50)が学生の質問に答えた。

川崎医療福祉大(倉敷市松島)で6日に開かれたシンポジウム。学生や地域住民ら約70人が参加し、当事者のために本当に必要な援助について考えた。

丹野さんの講演や学生との対談、県内当事者と車座になっての懇談会…。企画内容は盛りだくさんで、いずれも「当事者目線」で進められる。

貴重な経験

オレンジパートナーは2022年11月に県立、川崎医療福祉、美作、新見公立の五つの大学生約40人で設立した。年度ごとにメンバーを変えながら運営する。

メインの活動は年度末に開催する啓発イベントの企画。全員で集まるのは難しいため、ビデオ会議を利用して内容を詰めていく。

今回は質問を事前に集めてラジオ放送風に進行したり、自分にできることを参加者が紙に書いて掲げてもらったりと工夫した。

取り組みの周知のためインスタグラムも立ち上げた。シンポの会場では各大学の活動をポスターにして展示。若年性認知症の人や家族との交流の様子、認知症カフェの開催といった特色が参加者の目を引いた。

実行委員長の新見公立大3年新川玲亜(れあ)さん(21)は「福祉関係の仕事を目指す人も多く、当事者と接することは貴重な経験になる」と意欲的だ。

大きな期待

認知症の人や家族から学生に寄せられる期待は大きい。正しい理解が将来のケアや施策に生きるからだ。

だから「認識違い」には率直な指摘が飛ぶ。丹野さんがシンポのタイトルにあった「認知症になっても」という言葉に引っかかった。「これって区別じゃない？　認知症の人は増えるんだから『誰もが安心して認知症になれる』の方がいいのでは」と投げかけた。

学生にとって当事者と話すことは教科書だけでは分からない学びにつながる。携帯電話のアラーム機能や地図、電車やバスの乗り換え案内のアプリを使って、忘れたり間違ったりしないよう工夫しているという発言や、「病気の人としてではなく個人として接してほしい」といった要望は、学生にとって新たな発見だったようだ。

丹野さんは「学生が真剣に考えて企画し実行してくれることに感謝している。1人が変われば、その輪が広がって社会が変わる」と話していた。